

二〇二二年度

第三回 入学試験問題

国語（五十分）（全十ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていないか、印刷がはつきりしないところがあったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点・記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。



東京純心女子中学校

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「あたし」は相方の「るりり」と、「るりりと水口さん」というお笑いコンビを組んでいる中学二年生。テレビ出演が決まり、はりきってスタジオ入りしたものの、入り口での転倒により骨折してしまい、そのまま入院となる。るりりが一人でテレビに出演している様子を病室で見たあとに、「あたし」はあまり好きではない小松菜を食べながら、自分も小松菜のように個性の薄い存在なのではないかとショックを受ける。そんな時、るりりがお見舞いに訪れた。

「すいすいーっ！ 来るのんおそなってごめんな！」

るりりは、あたしのベッドのふちに飛びついて叫んだ。

「番組見てくれた？」

「ん、ああ、トモカといっしょに見たよ。『蔵ノ助』めっちゃうけてたね……。るりりもよかったよ」

「そうやねん。キエ蔵とイケ助と、番組終わってから、ずっとしゃべっててんけど、すごい！ おもしろいし、かしこいし、親切やなあ！ キエ蔵って！」

目をきらきらさせて、夢中になってキエ蔵とイケ助のことを話するりりを見たら、①過ぎ去ってしまった青春のさなかにいる「若者」を、まぶしく見る老人のような気持ちになった。

「よかったなあ。勢いのある子同士で仲良くなって……。ええ友だちに

なってもらいや」

あたしのコメントに、なにか異様なものを感じたのか、るりりは、きよんとした顔であたしを見た。

「すいすい、どないしたん？ 元気なさすぎ……。って、そら元気ちゃうわな。入院してんねんから！ あははは！」

るりりが、病室の天井をつきぬけるような、バカ笑いをした。

「うん……」

あたしは、うなずいた。「元気はゼロやな」

「あ、やつぱり折れたとこ痛い？」

「②痛いな。いろんなとこが」

あたしはうなずいた。

「あ、そう……。はよ元気になってや。ネタ合わせしたいけど、当分無理そうやな」

「ネタ合わせ……」

あたしは、その言葉がピンとこなかった。なんだか、自分の身近なことのように聞こえなかった。「ああ、そんな日もあったな……」

「ど、どないしたん？ すいすい。いつも男前やのに、なんや、じいさんみたいやで」

るりりが、ぎよっとした顔になった。

「うん？ どないもせえへんよ。今な、あたし、すごく大事なことを考えててん」

「……ど、どんなこと？」

「うん。あたしは、こんなことになって運が悪いなあって最初思ってた。転んで足折って、せつかくのチャンスをキエ蔵らにやってな。あいつらに運を吸い取られてるんちゃうか、なんて思ってたんや」

「すいすいやったら、そう考えるやろって、キエ蔵も笑ってたでえ」
るりりが大きくうなずいて、素直にそう言った。

(……なんや、キエ蔵にはそこまでお見通しなんか)

「そやから、キエ蔵、そのうち見舞いに来るって言うてたで。なんか、ええ話があるって」

「ええ話？」

「うん。あのね……。えへへ、ほんまはキエ蔵にまだ言うなって言われてたけど、こっそり教えるわ」

るりりは「あたし」に、キエ蔵からの推薦で、今度自分たちも一緒にテレビに出られる「と」になったと伝える。

「話はわかった。そやけど、るりり、あんた一人で出えな」

「え？ でも、まだそのコーナーできるの先の話やし、すいすいが歩けるようになってからでええって、制作の人も……」

「あんた一人で行った方がええねんて」

るりりに、終わりまで言わせなかった。

「その運は、るりり、あんたの運や。いや運だけやない。あんたのおもしろさが勝ち取った話や」

「でも、すいすいといっしょやないと……」

「あんたは大丈夫や。いや、あたしがおらん方がうまいこといくかもしれへん」

「ちよ、ちよっと、すいすい、それなに？」

「……もう一人でやり。その方がええんや。あたしと別れてキエ蔵も伸びたし。るりりはピンでもいける」

③ るりりが、ぽかんと目と口を大きく開いて、あたしを見た。

「すいすい？」

「あたしには芸人になれるような、華やかなもんがないねん。ぜんぜんきらきらしてないっていうか。もともと地味でな。どう料理してもあかんねんわ。小松菜といっしょやねん」

「小松菜って……、すいすい、きらいやったん？」

へえーつと、るりりが目を丸くした。

「きらいやったよ。だけど、それは自分に似てるからきらいやったってことに、さっき気がついてん」

「いや、でも、もち入り巾着といっしょに甘く煮んの、るりりは好きやけどなあ」

「そういうことやのうて、組み合わせのバランスの問題や。④ るりりみたいなあええ素材を、小松菜では、ええすきやきにだけへんってことやね

ん」

「すきやきに小松菜、入れてもええんちゃうのん？ そんなん自由やん。つていうか、るりり、すきやきにならなあかんのん？」

るりりが、不思議そうに首を傾けた。かたむ

「料理の問題やなくて！ とにかく、光ってないねん。あたしがな！ いや、あたしだけがな」

言いながらあたしは、どんどん気持ち枯れていった。水気がぬけるとともに、悲しい気持ちも、重い切なさも、薄れてきた。

「そやから、るりり。ピンになるか、もつとええ相方を見つけ。そや、キエ蔵に今後のことを相談したらきつとちゃんと話を聞いてくれるで。

よかつたな、ええ仲間ができて……」

あたしは、自分が泣くのかなと思っていたが、意外や顔は笑っていた。そこまで言うと、もう、⑤かえって気が軽くなったのだ。

「すいすい……」

るりりが、あたしのひたいに手を当てた。

「熱はないみたいやな。そやけど、よつぽど痛かったんやな。わかつた。るりりすぐにキエ蔵に相談するから」

るりりは、一人で大きくうなずくと、後じさりした。*3

「すいすい、今日はよう寝てな！ バイバイ！」

るりりが行ってしまおうと、ふいに大きなあくびが出た。

ぐったりとしたけだるい感じ。でも、快い虚脱感があった。きよだつかん

今まであたしの中でカンカンになって、ズーっとあたしを急かたてて

いたあつくるしいもの……が、どーつとよそに大移動していったような感じがして、心のどこかが、楽になったのだ。

あたしは、頭が痺れるほどの強烈な眠気に襲われて、がくうつとそのまま寝てしまった。

目が覚めた時には、あたりは真つ暗だった。

知らない間に消灯時間になっていたのだろう。食器も看護師さんが片づけてくれたのか、ベッド周りがきれいに整えられていて、ふとんもきちんとあごの下までかかっていた。

枕もとの時計を見たら、夜の十一時だった。まくら

（なんや、まだ、そんな時間なんか……）

ふと、横を見ると閉じられたカーテン越しに、ぼつんと淡い光が灯っていた。本でも読んでいるのだろうか。あいかわらずお隣さんは静かだった。その隣のベッドからは、小さないびきが聞こえた。

あたしは、つぶやいた。

「ああ、くたびれたなあ……」

すると。

「⑥……気のせいや」

と、どこかから低い声が聞こえてきた。

「え？」

声のする方を見ると、お隣のカーテン越しに、人のシルエットがゆらゆらと動いた。

「あんたな、くたびれてるって言うのは、思うようにものごとがすすまへんから、やる気が起こらんっていうこととちがうで」

かなり年配の、落ち着いた女の人の声だった。

「は、はあ」

「くたびれるっていうのはな、いろんなやらなあかんことが、いくつもあつてな、やつてもやつても手が回らなでな、体が四つぐらい欲しいわ、寝る時間も惜しいわと思うのに、休まなあかんと医者に言われるような状態。つまり一人前の人間がなるもんなんや」

ゆつくりと、諭すようなその言葉に、

「は、はあ。ほんなら、あたしはくたびれてないってことでしょうか」

あたしはカーテンの向こうの人に、思わず相談してしまった。

「あんたの話は、今日一日、聞くつもりやなかったけど、みんな聞こえてしもたからな……。よけいなことを知らんババアに言われたないやろけど……。あんた、自分が人より光ってないって言うて、友だちに、えらいごねてたな」

「は、はい……」

あたしは赤くなつてうつむいた。トモカやるりに自分が言った言葉のあれこれを思い出したら、急に恥はずかしくなってしまった。

「うちから見たら、あんたぐらいの若い子なんて、生きてるだけで光つ

て見えるで。今日のあの女の子も、あんたもピカピカや」

「……でも、その……。若さはあるかもしれないけど、芸能とか、そつちを目標そうと思つたら、ふつうのピカピカでは足りないんです」

「あんたは、自分をまだまだみがいてないのに、自分が最高のときに、どのぐらいのピカピカなんかわかつてるんか？」

カーテンの向こうの声が、くすつと、半笑いになった。

「……え」

あたしはふいをつかれて、言葉が出なくなった。

「自分がどのぐらいピカピカするんか、どんな光り具合なんかなんて、あんたぐらいの年でわかるわけないやろ」

「そ、そうなんですか？」

「そうや。ほんで、もひとつ言うたら、芸人やったら、あんたの光をええなあ、とか、もひとつやなあつて決めるんは、あんたやなくて、あんたを見るお客やる。なんで、あんた、自分の光り具合までも自分で勝手に決めるんな。あんたそこまで、えらいんかいな」

「うわ……」

あたしは、撥水加工のベージュのカーテン越しに繰り出される、⑦折はごいパンチの数々に、ひっくり返りそうになった。

「そ、そういうたら、あたしるりに……相方が、自信なくしてたときに言うたんです」

「なんて」

『あんたがお笑いをどう思おうが、そんなことは関係ないねん。あんたは、ほんまにももしろいんや。そんな子はめったにおれへん』って」
「ふん、ふん」

「そのとき、あたしはその……、今言われたことと同じことを言いたかったんやと思います。自分が光ってるかどうかなんて、あんたが決めるなって。それやのに……」

「まあ、ええがな。あるある。そういうことは。人に意見してるときは、みんなええこと言うねん。ほんで、たいがいそれは、自分に足らんことを言うてるんや」

「ははあー」
あたしは、次々飛び出す人生の達人的名言に、ひれふしそうになった。「しばらく、おとなしくしとり。ご飯食べて寝てたら、力があまって、いやでももつとピカピカしたくなるわ。あんたら子どもは、息してるひかりもの、みたいなもんやからな」

「は、はい」
⑧あたしは珍しく、子どもと言われても、ぜんぜん腹が立たなかった。

むしろ、「子ども」と言ってもらって、なんだかかほつとした感じだった。

「わかったら、また寝え」

「はい！」

あたしは、ふとんをかぶって、素直にすつと寝た。

(令丈ヒロ子「めっちゃ、ピカピカの、人たち。」より)

なお、本文には省略等があります。

*1 すいすい……「あたし」のこと。

*2 蔵ノ助……キエ蔵とイケ助のお笑いコンビ名。キエ蔵と「あたし」は小学校の時に同級生で、お笑いコンビを組んでいた。

*3 後じさり……「あとずさり」に同じ。

問一 ——線①「過ぎ去ってしまった青春のさなかにいる『若者』を、

まぶしく見る老人のような気持ちになった」とありますが、これは「あたし」のどのような気持ちですか。適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「あたし」とは違い、お笑いについて楽しそうに話す「るりり」に、強く嫉妬しとしている。

イ 「あたし」とは違い、お笑いについて楽しそうに話す「るりり」を、ほほえましく思っている。

ウ 「あたし」とは違い、お笑いについて楽しそうに話す「るりり」に、距離きよを感じている。

エ 「あたし」とは違い、お笑いについて楽しそうに話す「るりり」を、内心で見下している。

問二 —— 線②「痛い。いろんなところが」とありますが、折れたところの他に痛いところはどこだと考えられますか。漢字一字で答えなさい。

問三 —— 線③「るりりが、ぼかんと目と口を大きく開いて、あたしを見た」とありますが、これはなぜですか。五十字以内で説明しなさい。

問四 —— 線④「るりりみたいなきえ素材をくでけへんってことやねん」とありますが、ここで「あたし」が「るりり」に言いたいのはどのようなことですか。五十字程度で具体的に説明しなさい。

問五 —— 線⑤「かえって気が軽くなったのだ」とありますが、この時の「あたし」の気持ちをあらわした比喩表現を、本文中から一文で探し、はじめの五字を抜き出さない。

問六 —— 線⑥「……気のせいや」とありますが、年配の女の人がこのように言ったのはなぜですか。理由を説明した次の文の空欄に入る言葉を、二十五字以内で答えなさい。

【くたびれている」という言葉を、「あたしが】二十五字以内】
という意味で用いているから。】

問七 —— 線⑦「すごいパンチの数々」とありますが、その内容として**適当ではないもの**を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分ができていない事柄を人に意見したこと。
イ 自分の可能性を勝手に判断していること。
ウ いろいろと不平を言って友人を困らせたこと。
エ 芸人としての価値を本人が決めつけていること。

問八 —— 線⑧「あたしは珍しく、子どもと言われても、ぜんぜん腹が立たなかった」とありますが、それはなぜですか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これまで「子ども」は大人の言うことを聞くものだと思っていたが、自分勝手にふるまうことが許されると知ったから。
イ これまで「子ども」は無条件で大切にされるものだと思っていたが、将来のために自分で努力しなくてはならないことを知ったから。
ウ これまで「子ども」は未熟で良くないものだと思っていたが、伸びしろのある魅力的な存在であることを知ったから。
エ これまで「子ども」は周りから迷惑がられるものだと思っていたが、何もしなくてもほめられる存在であることを知ったから。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちは、時間はすべての人に共通していて、客観的に存在している
と
思っています。だって、人ごとに時間が違っていたら、学校の時間や
待ち合わせ時間が決められないし、電車や新幹線の時刻表も意味がなくな
ってしまいうでしょう。でも、①本当にそうなのか、と疑った人がいま
した。有名なアインシュタインです。アインシュタインは、時間がAキ
ソク的に流れていることは疑わなかったのですが、みんなが同じ時間を
共有しているのだろうかと考えたのです。そのために私たちがどのよう
にして時間を合わせているかをじっくり考え、人が運動していると時間
が流れる速さが異なっているということを見ました。時間が伸び
Bチヂみしていて、人ごとに違った速さで動く時計を持っているのです。
もつとも、その差はとても小さいので普段の私たちが気づくことはい
のですが、動く速さが光の速さに近づくとその差が大きくなることを予
言し、実験でCタシかめることに成功しました。

アインシュタインは、光の速さで飛ぶ宇宙船に乗って光を追いかけた
らどのように見えるだろうか？ と空想してみました。光と同じ速さで
同じ方向に動けば、光は止まって見えるだろうか、と。□、どうし
ても真空中で止まっている光は考えられません。そこで、思い切って光
はどんな運動をしている人から見ても同じ速さ（一定の速さ）で動く

□ □、その
いう仮定において物体や電磁波の運動を調べてみました。結果を「特殊相対性理論」として発表したのです。そこには②思いがけ
ないことが予言されていました。

この理論によれば、非常に速く動く物体の時間は遅れる（ゆっくり進
む）ことが導かれたのです。二つの同じ速さで進む時計の一方をロケッ
トに乗せて速く運動させれば、その時計は運動していない時計に比べて
ゆっくりしか進まないというのです。運動させた時計が狂ったのではあ
りません。二つの時計を交換しても同じ結果になるため、時計がおかし
くなつたのではなく、運動によつて時間の流れる速さが異なつてくると
考えざるをえないのです。

H・G・ウェルズという作家が『タイムマシン』というSF小説を発
表したのは一八九五年でした。空間をあちこち行けると同じように時
間も自由に行き来できたらどんなことが起こるだろうか、そんな空想か
ら生まれた素晴らしい小説でベストセラーになりました。人間は誰しも、
過去に戻つてどんなふうにかを見たいと思つているためでしょう。
なふうにか世界が変わつたかを見たいと思つているためでしょう。

タイムマシンが、空想ではなく③として本格的に研究されるよう
になったのは、アインシュタインの相対性理論が発表されてからのこと
でした。時間が絶対的に固定されているものではないことから、運動を
工夫すれば時間の流れが変えられるという考えが広まったためと思わ

れます。(中略)

未来へのタイムマシンは、光速に近い乗り物④造れば可能になります。地上に双子の兄弟がいたとしましょう。兄が光の速さの八割という高速のロケットで片道八光年の宇宙旅行をして戻ってくるとすると、地上にいる弟から見ればDオウフクで二〇年かかります。その間に弟は二〇歳だけ年をとったのです。ところが、ロケットが飛んでいる兄の時計は歩みが遅く、一二年分しか動いていません。兄は一二歳しか年をとっていないのです。㉓、未来への時間旅行によって、兄は弟より八歳だけ若くなれたことになります。各人が異なる速さで動く時計を持つingためと言えるでしょう。【イ】

では、過去に戻ることはできるのでしょうか。過去に戻るための唯一の方法は、光の速さより速く動くこと(あるいは光速より速い信号があること)です。無限の速さでロケットが飛べると仮定しましょう。地上にいる弟が一〇年経ったころ、ちょうどロケットが方向を変える時期に、一瞬のうちに弟が兄の乗っているロケットに乗り移れるとします。すると、弟の時間は兄の時間(六年)に変わってしまうのです。そして、再び無限の速さで元の地上に戻ると、弟は兄の時間である六年しか経っていないことになります。一〇年経ったときに旅立って、六年しか経っていない過去の自分に戻るわけです。異なった系には異なった時間が流れているので、光速より速く動けるなら時間を自由に乗り移れることになります。まさにタイムマシンが可能になるのです。【ロ】

⑤でも、それを許すと困ったことが起こります。Aはある場所において、Bが離れた場所^{はな}で石を投げ、その石がガラスに当たって割れる場面を見ているとしましょう。㉔光より速い信号があれば、Aにはガラスが割れてからBが石を投げたというEジュンジョ^{ジュンジョ}に見えるのです。ここでは、原因(石が当たる)が先にあつて結果(ガラスが割れる)が後であるという物事(時間)のジュンジョが逆になっています。ところが、世の中に起こることは、必ず原因が結果より先になければなりません。これを「因果律」と言いますが、光速より速い運動があると因果律を壊すことが起こりうるのです。【ハ】

あるいは、過去に戻るなら困ったことになりかねません。過去に戻って両親を結婚させないなんてことが起これば、自分自身が存在しないはず^{はず}です。【ニ】

アインシュタインの特殊相対性理論によれば、物体が運動する速さには光速という上限があり、それ以上には速く運動できません。どんなにエンジンをふかしても光の速さには到達できないのです。むしろ、光の速さを超える信号も許されません。だから、⑥過去に戻るタイムマシンは作ることができない、と言うことができるのです。

(池内了『時間とは何か』より。なお、本文には省略等があります。)
* SF小説……空想科学小説。

問一 — 線①「本当にそうなのか、と疑った人がいました。有名なアインシュタインです」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「そう」がさす内容を本文中から三十字以内で探し、はじめと終わりの五字を抜き出しなさい。

(2) アインシュタインは、どのようなことを発見したのですか。本文中から三十字以内で探し、はじめと終わりの五字を抜き出しなさい。

問二 ア・ B・ C・ Dに入る言葉を次のア～クの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア もつとも イ けっして ウ もし
エ ところが オ そして カ なぜか
キ すると ク つまり

問三 — 線②「思いがけないこと」とありますが、その内容を本文中から三十字以内で探し、はじめと終わりの五字を抜き出しなさい。

問四 ③に入る言葉を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 運動 イ 科学 ウ 時間 エ 過去

問五 ④に入る言葉を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア から イ まで ウ さえ エ でも

問六 — 線⑤「でも、それを許すと困ったことが起こります」とありますが、「困ったこと」とはどのようなことですか。本文中の言葉を使って六十五字以内で説明しなさい。

問七 次の一文は本文中の【イ】・【ロ】・【ハ】・【ニ】のいずれかに入ります。どこに入るのが適当ですか。イ～ニの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ところが、過去に戻れた自分は存在しているのです。そんな矛盾が生じてしまうこととなります。

問八 — 線⑥「過去に戻るタイムマシンは作ることができない、と言うことができるのです」とありますが、それはなぜですか。適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 時間はすべての人に平等であるという、この世界の原理を変えてしまうことになるから。

イ 物体が運動する速さには光速という上限があり、光の速さを超える運動は存在しないから。

ウ 過去に戻り、過去を変えてしまうと、今が変わってしまうという矛盾が起きてしまうから。

エ タイムマシンは実験の結果、空想の産物にすぎないということが判明したから。

問九 ……線 A 「キソク」・B 「チヂ (み)」・C 「タシ (かめる)」・D

「オウフク」・E 「ジュンジョ」のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。